本実践・研究から見えてくること

研究協力者　佐々木　雅子
（秋田大学教育文化学部　英語・理数教育講座）

授業づくりを支えるインタラクションと省察

１．インタラクションの仕掛けと充実

授業の中にインタラクションが起こるように、単元計画を立て指導案を作成することは非常に重要である。教師と生徒、生徒と生徒、教師と ALT のインタラクションは、ことばを pick　up するためのインプット（からインテイク）の機会となるとともに、既習表現を主体的に選択しながら新出表現を使用する機会にもなる。すなわち、言語習得が起こる機会が用意されることになる。藤田先生の授業は、このインタラクションの連なりで構成されていた点に特徴がある。Warm-up の歌の導入から、ALT からのクイズ、留学生からのメッセージ動画、ふるさと紹介のグループ練習、教師または ALT を相手としたリハーサル、タブレットによるグループでの省察に至るまで、多様な形式でインタラクションが観察された。多くのインタラクションの機会をつなげた授業構成を提案できた点は、今年度の研究成果である。

今後の課題は、インタラクションによる言語習得を起こす手立てを工夫し追究することであると考える。やり取りの展開の中心が、予め暗記した表現の発話にあるのではなく、その場で児童自身が内容と言語形式を選択した上での発話にくるように、インタラクションすなわち言語活動を仕掛けるとよい。本時の場合では、留学生からのメッセージ動画への返信は、その内容と言語形式が既に相当固まっていた感があるので、代案としては、その場で返信の行為が自然に始まるように活動をデザインする。そうすることで、児童は真実味のある必要感を感じ、相手を意識した返信作成に挑もうとするため、インタラクションはより生き生きとしたものになるのではないだろうか。結果的に、授業の面白味が増すと同時に、既習事項がさらに生きて働きながら、新出の知識・技能と統合されることが期待できる。言語活動のデザインが即興性の強いものになれば、当然、試行錯誤の度合いは強くなるであろう。試行錯誤が多い言語使用を言語習得にまで高めていく指導の課題点としては、教師の介入と児童同士のやり取りの質を高めていくことが挙げられる。

２．目的に応じた省察

省察は、学習者が自分の言語能力の発達を伸ばしていくために必要欠くべからざるものである。そして、その省察の観点は、言語能力のどの部分を伸ばすかによって自ずと異なってくると思う。例えば、学習する文法項目の使用の正確性を伸ばしたいのであれば、学習者が自分の誤りに気づくような教師の介入や正確性に学習者の注意を向けるような言語活動を実施し、その過程で気づいたことをある程度言語化するような振返りが考えられる。また、異文化間コミュニケーションへの積極的な態度を伸ばしたいのであれば、情緒的なレベルから実際の行動レベルまでどこかに切り口を設定して感想を記録していくポートフォリオが考えられる。すなわち、振返りの観点（例：正確性、態度）を明確にした上で、具体的な省察方法と手順（例：タブレット撮影と視聴による発音の明瞭性の向上）を示し、省察が伸びに貢献するようなロードマップを描くことが大事ではないかと思う。したがって、学習者の省察と教師の評価が、相互作用するような関係性を築いていくことが必要である。本実践のタブレットを用いた省察は、全体的な効果が実感できた点は収穫である。今後の課題は、観点の明確化や方法と手順についての研究を進め、評価と連動させながら豊かな振返りを推進していくことであろう。